

大地

第 39 号
2012. 1. 20. 発行
浄 國 寺
上越市 3丁目 14-10
☎025-523-5724

年の初めに想う

山崎隆昌

年が変わると、何とはなしに気持ちも新たに、また一年が始まることを感じます。

本年の元旦は、おだやかな年明けでした。曇天ながらも時には薄日も差し、雪化粧した境内は白一色に美しく映えていました。都会人には解るまい、この雪景色こそ雪国に住む者の特権だと心密かに悦に入っていると。『自然冷房』が十二分に効いた本堂で、家族そろって朝のお勤めを行い、庫裡に戻り雑煮を食べ身と心を温めました。間もなく玄関に來客の気配、見ると式台に年賀状の束、今年随分早い配達です。賀状は例年の五分の一。そう、本年我が家は喪中で年賀欠礼です。昨秋、年賀状を出すか否かで妻と話し合い、結果取りやめました。たかが年賀状ですが、今にして考えると日和見だったかもしれない。喪に服することについてはっきりせぬまま、何となく社会習慣に従っただけのような

気がするのです。

広辞苑には『喪』について「死亡した人を追悼する礼。特に、人の死後、その親族が一定期間、世を避けて家に籠もり、身を慎むこと」と記されています。

母の命終は昨春の二月十七日で、間もなく一年になります。この一年、家に籠もり、身を慎むことなどは程遠いだけバタバタと日々を過ごすのみでした。

昨年の暮れ近くなつて檀家の幾人かの人から遠慮がちに聞かれました。

「今年も年始参りは、欠礼となるのですかね」私は笑いながら、

「浄國寺と山崎は別です。浄國寺の阿弥陀様には、一切の年賀欠礼はありません。どうぞお正月にはおでかけ下さい」

一年の時の流れのなかで、それぞれ人には、近しい人の死を含め、抜き差しならぬ出来事が起こります。その一つ一つの出来事が、我が身に与えられたご縁であり、人はそれを抱えて新しい年を迎えます。

喪中云々など関係なく、ご縁につながる人々が、正月を迎え「新年おめでとう」と和して喜ぶべきではないかと思うのです。

長い時間をかけて作り上げられてきた社会習慣は、社会の大切な決まり事でありすが、けれども事を処するに、社会の決まりに順ず

る前提として、自ら我が身の立つ所を問うことがあるのでしよう。

いま、私の中で喪に服することを考えると、東日本大震災で亡くなられた一万五千八百人の人々の命を思います。今なお生死すら確認出来ない三千五百人の人々の命を。

この場合、喪に服するとは、日本中が時を定めて、歌舞音曲を止め、静かにすることではありません。それは、東日本大震災の出来事を我が身の立つ所に合わせ、一人一人の中で問い続けることです。かく言う私自身が危ういもので、酒は毎日飲むし、暖房はガンガン使うし、車は乗り回す。情けないほど震災前と何も変わらない自分があるのです。

大震災後私の中では、人の死に出会ったとき、あるいは小説等の中に死を見たとき、それらの死と、大震災で犠牲となられた人々の死を合わせて考えてしまうようになりました。年の初めにしては、どうも話が重すぎる。

そこで一転、この正月、とても目出度い話がありました。若い友人夫婦に子供が誕生したとの知らせ。男の子で母子ともに健康。

誕生日は一月一日。二人は、赤ん坊には龍のごとく雄々しく立ち昇れと『昇太』と名付けました。

これから益々難しい時代、新しい命が名前のように健やかに雄々しく成長されることを願ってやみません。

婆馬鹿でしようか

鴨島 鹿住慶子

私の夫は、十三年前に浄土?に行っていました。

他人様には、まじめで、やさしい、働き者と見えていた様ですが、うちの中では昔気質の頑固者でした。無口で、毎日お酒を切らしたことがあります。だから、夫は家庭内のことは何にもわかっていませんでした。

私には三人の子供がいましたが、末の子が生後三カ月に受けた予防注射によって後遺症で脳性麻痺となり、その時はてんやわんやでした。無我夢中の毎日で、私には夫に腹を立てる暇もなく、時々グチッているくらいでした。

その後、脳性麻痺の末の子を病院へ入れていただきました。やがて上の子供たちも、それぞれ成長し大人になり、結婚もして孫もできるまでになりました。

やれやれ、これからは我が世とっております。ましたら、今度は夫に肝臓癌がみつきり、私は病院につきまきりとなり、また時間追われる生活になりました。その生活は二年ほど続き、夫はあの世とやらへ行ってしまいました。その頃から私の足腰痛はさらに悪くなり、足腰をさすりながら病院通いの毎日となるの

です。

今年の盆に東京の学校へ行っている孫(男の子)が帰ってきて、一緒にお墓参りに行きました。出かける時「ほらつかまって」と手を差し出し、クツを揃え、肩を貸してくれました。途中も私のそばから離れないで、やさしくめんどうをみてくれたのです。

今までにも、何度も他人様からそんな親切を受けていたはずなのですが、違ったもので若い孫のやさしさが胸に広がり、うれしくて、いつまでもホカホカとあたたかいものがのこりました。

大きな声で「うちの孫はこんなにやさしい子に育ちました」と言って歩きたい気持ちでこれからも変わらないと祈る気持ちでいっぱいです。婆馬鹿でしようか。

※鹿住さんはものごとポジティブな人。趣味も、絵画、書道、茶道、等々多才。足腰痛でご苦労されているが、何より明るくおやかで、お話をしていると気持ちちが和んでくる。

【浄國寺同朋会にご参加を！】

◇毎月第三日曜日 午前八時二十分〜十時

◇正信偈同朋奉讃によるお勤めの後

講師のお話

◇お茶を飲みながら懇談

※二月は十九日、三月は十八日の予定

ワン公物語

「蓮(れん)」のこと

山崎慎子



ウチにパグ犬の蓮が来たのは、二〇〇〇年八月七日のことである。

黒のラブラドル犬ハイジを見送ってから暫く、私達は次の犬を迎える決心がつかなかった。それはよく言われるように、別れが辛いからという理由ではなく、ハイジが余りにも賢い犬だったからに他ならない。

一緒に暮らしたのは、わずか三年程でしかなかったのに、その存在は家族にとっては重く、決して忘れることができないものだ。盲導犬として、小国町の中村さんのパートナー役を終えて我が家に来た時、ハイジは既に視力かなり低下していた。しかし、新しい環境、新しい家族に慣れるための努力は怠らなかつた。散歩の時「ハイジ、ここは駅。ここは郵便局。ここはスーパー。」話しかける言葉を理解しようとする仕草がいじらしかった。ハイジについては以前にも書いていたのでここでひとまず、パグ犬の話に戻ろう。

ラブラドルからパグへ。ラブの魅力は強烈で、もう一度共に暮らしたい誘惑は強かつたのだが、高齢の母のこと、ハイジと比較してしまうことへの怖れなどから、全く違う犬

種に、というのが私達の諒解だった。かくて
選り抜かれたのが可愛い（滑稽な）顔のパグ。
八月七日は、当浄國寺の夏の法要が勤めら
れる。法要を終えて夕刻、母と私は子犬を迎
えに獣医さんのところに向かった。

待っていた子犬は牛乳瓶位の大ききで、大
きな目とつぶれた鼻でキョトンとしていた。
余りの小さきに少し戸惑いながら、子犬は助
手席に坐る母の膝の上のタオルに包まれて、
家に辿り着いた。

折しも、お濠の蓮は満開。子犬は「蓮」と
名付けられた。お盆の忙しさの中で、それで
も蓮はトイレトレーニングをしつゝ、家中の
愛情をいっぱい浴びて、すっかり同居に馴
染んでいった。「首輪もつけないなんてノラ
犬のようで厭ねエ」という母の声にも耳を貸
さず、夫が首輪も鎖も拒否したので、家の中
で放し飼いになった蓮は当然、いろんなこと
をやらかしてくれた。

その中でも最たるでき事は蓮三才の時のこ
とだ。今ではお寺でお葬式を行うことも、すっ
かり珍しくなってしまうが、その年の三月
下旬お通夜から一切をお寺で勤めた時のこと。
近ごろは精進料理そのものが影を潜めてい
るし、料理は全て持ち込みだったので、その
内容は私達の知るところではなかった。火葬
場へ向かう人々が、後から片付けますと言
い残して慌ただしく出払った後、部屋は空になっ

ていた。茶の間に居た私がふと気づくと蓮の
姿がない。蓮！れん！と呼び乍ら胸騒ぎを押
さえつつ座敷に直行した私の目の中に飛び込
んで来たのは、酢豚の器に顔ごとつっこんで
ハフハフ言っている蓮の姿である。

その瞬間、蓮は無上の幸福に包まれたに違
いない。けれど、酢豚の中には犬の「天敵」
玉ネギがどっさり入っている。

……案の定、嘔吐が始まり、蓮は瞬く間に
奈落の底に落ちたのだ。それから獣医さん
に行く迄、嘔吐は幾度となく繰り返された。吐
き出された量は呆れる程大量で、玉ネギも肉
も人參も形のままという有り様だった。

点滴を受け、どうやら最悪の事態だけは避
けることができた。後から考えれば、玉ネギ
が生ではなく火が通されていたこと、直後に
何度も何度も吐くことにより、胃の中に玉ネ
ギが殆ど残らなかったことが、どうやら蓮の
命を助けてくれたらしい。ひどい場合は、真っ
赤な血を肛門から噴出させ、そうなれば命は
殆ど助からないらしい。

以上が今月六月に十二才になる蓮のひきお
こした最大の事件のあらましである。そして
それ以来蓮は、体質的に重荷を負うことになっ
てしまったのだ。まず、アレルギー体質で湿
疹ができ易く、年中体のどこかにかゆみが生
じている。耳はジクジクとした耳垢が溜まり
毎日拭きとってやらなければならない。加齢

と共にドライアイ気味になり、目ヤニを取り
除き目薬を注す必要がある。おできのよう
なものができ易く、体のあちこちに手術の跡が
残っている。

本来蓮は、獣医さんのことが大好きだった。
「れん、先生のとこ行くよ」と声をかけると
うきうきと尻尾を振り、甘えた声で早く早く
とせがむ程に。しかし、度重なる検査や手術
治療で、すっかり苦手になり、待合室での順
番待ちの間、武者震い宜しくガタガタと震え
続けているのである。

そんな蓮を、私は密かに「受難犬・蓮」と
愛しさをこめて呼んでいる。

蓮は人見知りをする恥ずかしがりで、妹分
の華とは対象的である。既に老境にあるので
なにやら風格を増し、白髪が増え、動作も遅
くなって「蓮、お前も同じね」と、私達飼主
をして言わしめている。

冬来たりなば

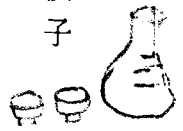
啓蟄やいのちの響き聞くような 佳都子

頸城平野は厚く積もった雪のなか。まだ
まだ冬は続きます。屋根の雪下ろしも心配
けれども三月には春のひかり。雪解けとと
もに、生き物のいのちが躍動する啓蟄、
木々の芽吹きも美しい。

雪国も悪くないなアと思います。(隆昌記)

酒は静かに

山崎慎子



山崎の家は代々酒豪揃いで、曾祖父、祖父のお酒にまつわる逸話は、繰り返し聞かされてきた。

言うまでもなく夫は無類の酒飲みである。これはまあ致し方のないことと初めから諦めはついていたので、今更どうこうということはない。いかに深酒をしようとも、たとえ午前様の帰館であろうとも、余程丈夫な肝臓とみえて、翌朝は定刻通りの早起きで、爽やかな顔をしている。

対する私は全くの下戸である。日本酒なら小さな盃に一杯が限度。ビールならコップに五センチ程を時間をかけて呑むのがやっとである。ちなみに私の姉は奈良漬でも酔っ払ってしまふタチであり、兄や弟も酒席を苦手とするタイプで、夫に言わせれば「義兄さん、あれで酒を呑めたらもっと楽しいんだけどなァ」となる。

そういう二人の間に生まれた子供はどうか。最もお酒に親しんでいるのは恐らく、娘である。帰省の折々に父親の晩酌にもマメに付き合ってくれている。

最も私に似てしまったのは次男。ビールをコップに一、二杯がせいぜいだろうか。

長男は、毎日呑みたいとか沢山呑みたいと

いうタイプではない。それでも最近しばしば父親の晩酌に付き合うようになってきた。あくまでも自分のペースを守りつゝ。

その長男がある日、とんでもないことを言い出した。「ねえ、お酒をご飯にかけて食べたらどうだろう。旨いかねえ」

とんでもない、と思ったのには訳がある。その発想自体にも呆れたのだが、DNAのなせる技かとの思いがよぎったからである。私自身はアルコールを受け付けないが、母方の伯父は結構な酒豪であった。大酒飲みではあっても、決して乱れたり無茶なことはしない、楽しい酒飲みで、普段もニコニコ、お酒を呑んでもニコニコしていて、親類の人々の中で最も慕った伯父のひとりである。

伯父は修験道の寺院の住職をしていて、山伏の大先達でもあった。お寺には全国から信者が集まり寝泊まりをして、修行をする機会がしばしばあり、そんな時は村中がお祭りのような賑わいであった。大先達である伯父は言うまでもなく大変な忙しさになる。

食事も摂らなければならぬ。お酒も呑みたい。けれど時間がない。その時、伯父はハタと閃いたのだ。「そうだ、両方一緒にすればいいんだ！」かくて、小井にご飯をよそいそこにお酒をぶっかけ、お茶漬よろしくしゃぶしゃぶとかっこむ。よく病気になるなかつたものだと思えるが、伯父は自分の編み出した方法に相当満足していたようだ。

以上のエピソードを全く知らなかった長男が突然、前述のように言い出して、呆れるやら驚くやら。

私自身は呑めないのに山崎という、お酒に極めて寛容な環境に身をおいて四十余年。感覚がどこか緩くなっているのだろうか。「今日は残りご飯だから、明日の炊きたてご飯にした方が良いんじゃない」

翌日、夫と長男は早速お酒漬ご飯に挑戦。「んめ！」の斉唱。全く笑うしかない場面であった。「でも、これを毎日やったら確実にアル中か糖尿病になるね」と冷静な結論。

その後、焼酎ではどうかと試してみるもこちらはあっさり却下で、今のところ再挑戦はない。

酒は静かに呑むべかりけり
ということであるらしい。

早朝の道つけ

小型ピーターで除雪する。玄関から門までの参道、本堂横の車庫までの道、駐車場等々。雪が飛ばされる様は、まるで自分が大型除雪車のオペレーターになったよう。満足、満足。

ところで、現在ピーターが活躍している場所は、私が子供の頃、早朝わら靴にかんじきを付け、親に叱咤されながら、雪を踏み締め道つけをしたところ。変われば変わるもの。今の丈夫な身体は、道つけのお陰が多少あるかも知れない。感謝せねばならぬ。(隆昌記)